

プロジェクト名	教員養成カリキュラムにおける色材を用いた絵画指導教材の開発		
プロジェクト期間	平成 23 年度		
申請代表者 (所属講座等)	加藤隆之 (美術教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	
<p>研究の目的</p> <p>現状の教員養成カリキュラムにおける絵画指導の、特に筆者の専門とする油彩画の指導における現状の問題点を挙げた上で、その問題点の克服と新たな指導教材の提案として本研究の目的を述べたい。</p> <p>まず、油彩画授業における現状は、基本的な道具の使用法の解説から入り、油彩画の制作を通して表現と描画を経験させながら絵画についての基礎知識が習得できる内容となっている。これは専門的な学習によって、描画に関する知識が習得でき絵画指導力の向上につながるという考え方である。その経験と知識を教育の現場へ還元することが、教員養成カリキュラムにおける絵画の授業目的である。しかし、現状での問題点として、例えば油彩画の授業では表現に対する専門的な内容の指導が中心となり、その知識と経験をどのように小、中学校の描画指導へ生かしていくのかについて具体的な道筋を示すことができていない。また、作品制作のための描画指導に偏っているため、学生は自身の制作経験だけに頼った指導力しか習得できない可能性がある。そして描画材料の扱い方や知識が乏しく、描画を題材とする教材研究への発想力が欠如してしまう。もちろん、専門性の高い学習を経験することで初めて身につく指導力もあるため、現状のような専門性の高さは維持すべきだとも考えている。そこで、描画の導入部分に絵画組成をもとにした描画材料の解説を取り入れ、使用する描画材への理解を深めることができれば、素材と描画の両方の知識から図工や美術の教材研究のための能力を養うことができるのではないかと考えている。その上で、実制作を通してより専門的な絵画の素養を身につけ、描画の指導力の向上を図るほうがよいのではないかと考えている。このような点を踏まえて、大学の絵画に関する授業において、絵画組成と描画材料を指導するための視覚的資料教材の製作を本プロジェクトの目的とした。また、今後取り組んでいく絵画指導法の研究の基盤資料として、この資料教材を使用した指導法を確立し教員養成カリキュラムのなかに取り入れてきたいと考えている。</p> <p>研究の内容</p> <p>視覚的資料の製作について、具体的にどのような描画材料を収集し、絵画組成と関連させた資料にしたのか述べてみたい。収集した素材は、油彩画に関連する描画材料の顔料、油絵具、画溶液、樹脂、そして描画道具の筆である。特に、顔料と油絵具といった色材に関してはできるだけ多くの種類を集めている。顔料は 65 色、絵具は単一メーカーで 146 色、複数メーカーを合わせると総数は 189 色となる。絵具の色はカタログや絵具自体のラベルにも印刷されているが、どうしても実際の色とは異なっている。そこで、収集した絵具を使用し色見本も合わせて作成した。これにより色名と実際の絵具の色の比較ができ、言葉では説明できない色味を伝えることができる。今回は色材の収集について力を注いでいるが、これには色材を用いた教材と感性の育成とを関連させたいというねら</p>			

いもあった。現在の小学校学習指導要領図画工作科、中学校学習指導要領美術科のいずれにおいても感性という用語が用いられるようになった。それは必然的に指導する側にも感性が求められていると捉えることができる。感性を重視した指導を目指すために、大学の教員養成課程においても感性を深めた多くの実体験のできるカリキュラム作りが必要であり、絵画領域における学習では本物の素材に触れる経験値を増やして感性の深化につなげることが可能となる。本プロジェクトで作成する視覚的資料は、本物の色を感じることできる資料として学生への感性教育に直結した教材となりうるのではないかと、そして鑑賞教育では実物の作品に触れることが重要な要素となるが、それは制作に関しても同様に当てはまることであり、知識だけに偏らない経験を通じた学習の機会をこの教材によっておこなうことができる。補足として、感性に関する考察については既に「色材を用いた感性教育教材に関する考察」(加藤隆之、平成 24 年福岡教育大学紀要 第 61 号 第 5 分冊 芸術・保健体育・家政科編 17 - 22 頁)にておこない、福岡教育大学附属幼稚園にて色材を用いた保育を実践済である。この実践において、感性の伸びは具体的な数値であらわすことはできないが、幼児の表情や言葉から感動体験を経験していることは間違いなく、感動体験が感性の育成につながると捉えている筆者の考えからすると、まちがいなくこの実践にて感性を育むことができたといえる。

研究の進め方

研究の進め方として、視覚的資料となる絵具やその原材料など色材に関わる実物の素材収集をおこなった。収集後は、展示と持ち運びが可能となる展示ボックスを製作し素材を収納している。本研究をおこなうにあたって基本資料としたのが、目黒区美術館が教育普及活動のために作成している「引き出し博物館」と名付けられた教材である。台車型のボックスに引き出しが収納され、一つ一つの引き出しに画材、木、紙、金属の 4 種類の素材が視覚的に配置され資料化されている。また目黒区美術館では、この教材を用いたワークショップを長年にわたり開催している。このような教材を用いた教育活動について内容と利用方法を検証した上で、教員養成カリキュラムでの使用を見越した本プロジェクト用の提示方法について、どのような形態が適しているのか思案した。

その結果、資料ボックスの仕様については、今後の教材としての使用を踏まえて以下の工夫をこらしている。基本資料とした目黒区美術館の「引き出し博物館」では、描画材料である資料をアルミ台にエポキシ樹脂で固定し透明なアクリルケースでふたをしている。展示物としての保存性や耐久性を考えて完全に密閉した仕様のため、資料を実際に手に取ることはできない。一方、今回製作した資料では実際に取り出して使用でき、なくなれば補充できる商品展示ケースのような形態を目指した。これにより、授業において必要なときには素材を取り出して使用し、実体験をともなった授業作りが可能となった。

実施体制

個人研究

プロジェクトの成否にかかわる展示ボックスの製作は、外注せず学内の技術センターに発注した。技術職員の石上氏と何度も構想を重ね、限られた予算の中で外注品並みのボックスを製作することができた。石上氏は今回の成果をだすことができた影の研究協力者である。

今後予想される成果

本研究の成果は、視覚資料教材を製作できた点にある。今後は、絵画指導法の研究にこの教材を生かすことで以下の成果が期待できる。

これまでの描画表現における専門的な能力の習得に加えて、描画材料の知識を身につけ素材と表現との関係性まで理解できるようになる。これは素材と表現をもとにした教材研究のための能力へとつながる。

素材を理解した上で教材研究をおこなうことは、図画や絵画の授業が描画指導だけでなく色を楽しんだり描画の過程を楽しむことのできる、教材作りや指導内容へと移行することができる。教員養成カリキュラムにおける授業のなかでより感性を培うことができ、教員として現場に立った際の感性教育の幅を広げることができる。図画工作科における児童の描画に対する苦手意識は、出来上がった作品を比較されることが原因の一つにある。そこで従来からある作品作りを重視した写生課題ではなく、色の美しさや楽しさを体感できるような過程を重視した題材作りに移行させることで、小学校学習指導要領が掲げている「感性を働かせた創造活動」が可能となり、豊かな情操の育成へとつながることができる。そのような題材作りのためには、現場で指導する教員自身の感性の幅と、前述のような専門的な描画材料の知識と経験が必要となる。大学院レベルでのより専門的な絵画組成の授業が可能となり、理解度の高い授業として内容を充実させることができる。

研究の今後の展望

教員養成カリキュラムにおける絵画の基礎的な授業において、より専門的な内容をまず初めにもってくることで、実は基礎の理解が深まるという考え方から、本プロジェクトでは視覚的資料教材を製作した。今後は、この教材を用いた授業の指導法について検証し絵画指導書としてまとめた。また、本来筆者の専門である西洋画古典技法の研究について、その古典技法の学習を取り入れた基礎的描画指導を開発しその指導法について体系づけた編纂をおこなっていく予定である。

本プロジェクトにより製作した資料

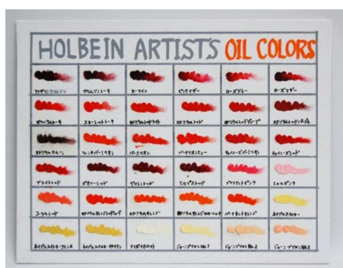


65 種類の顔料と古典で使用されたウルトラマリンプールの原料となるラピスラズリの原石を収納。色名と実際の色を見ることができる。

※顔料とは色の粉で、天然素材の土や石、化学的に作る合成の素材がある。



色や性質のことなる 189 色の油絵具を収納。左図版はもっとも多く
の色数を製品化している H 社の
146 色の油絵具を収納。絵具はア
クリルのふたを引き出すことで
取り出し可能となっている。



H 社の油絵具 146 色をキャンバス
へ着色し、実際の色見本として確
認できる。印刷ラベルだけでは分
からない色味の違いを知ること
ができる。大学院の授業では、実
際にこの色見本の作成を体験し、
自身の教材として生かしてもら
う予定。

